

幕末に来日した人々と文学との出会い

Literature and Foreigners in Japan in Late Tokugawa

望月 洋子*

Following the reopening of Japan in the 1850's, large numbers of pioneering people from Europe and America came to Japan, either pursuing official missions or drawn by the spirit of adventure. Yet during its long period of self-imposed isolation, information about Japan had been unavailable in Europe or America. How did those who came to Japan with no advance knowledge deal with the language, what books did they read, and how did they understand the rich but complex literature of the age? In researching and writing about J.C. Hepburn, I learned about many foreigners who came to Japan from a variety of countries, and would like to pay tribute to their efforts.

国際交流の第一歩は、互いの情報交換であると思うのだが、長い鎖国政策の間、幕府は、世界の情勢を、長崎という小さい窓から摂取するばかりで、日本側の事情は秘して流さずの方針で通して来た。

* MOCHIZUKI Yoko 作家。大阪女子大学卒。著書に「妖精のうた—中国大陸芸能行—」「加津佐物語」「ヘボンの生涯と日本語」などがある。第39回読売文学賞受賞。

だから世界の人々にとって、日本は謎の国であり、あるいは黄金の光に包まれて語られ、あるいは暗黒の野蛮国として語られた。こちらでも平田篤胤が説いたように、開国のまぎわまで西洋人像があやまった形で伝えられていたのである。

江戸時代というと、西鶴・近松・芭蕉をはじめ文学の上に天才的な芸術家が輩出し、宣長白石等学者の傑出も多いのだが、後期には、そうした才能も爛熟の度を濃くし、幕府の衰退や、欧米列強の圧力による不安も加わって、混沌とした状態のまま、世紀末の様相になだれ込んでいった感がある。

長崎の出島に来て、1690年頃に「日本史」を書いたエンゲルベルト・ケンペルの購入した書物は、日本紀・太平記・平家物語・大坂物語・島原記・神代記ほかが記録に残っている。

1823年に来日したフィリップ・フォン・シーボルトの買い集めた書籍は、膨大な量にのぼる。当時の知識人としても一流の門弟たちの協力により、幕府の厳しい国禁をおかしてまで蒐集した資料は、閉された国日本の姿を欧米に示す貴重な資料となった。文学関係の書物は、太平記・平家物語など、他のジャンルに比べると少いが、度々のシーボルト展によって知る人も多いだろう。彼自身も、日本人および歴史に関する意見のほかに、源義経に関心を持ち、義経と成吉思汗とを結びつけた説を発表し、後述のW・E・グリフィスなどもこれを読んでいる。

日本開国を実行したペリー提督は、日本についての予備知識を得るためにケンペル、チツィング、ゾーフ、メイラン等の著した資料を漁ったが、もっとも信用と満足をおぼえたのはシーボルトに依るそれだったと述べている。(ホークス「ペリー提督日本遠征記」)幕府の訊問と追放によって、一旦日本を去ったシーボルトは、「日本」の出版に全力を集中するのだが、息子のアレキサンダーには厳しく漢字を教え日本語を学ばせて、開国後の再訪を実現する。

勝海舟から「日本開国の恩人」と称されたヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルチウスは、蘭商館長として活躍しつつ、「日本文典」proeve eener Jappans-

che Spokkunstを著した。幕末に来日した欧米人がもっとも重宝したのは、この書であった。資料2に、その一節をコピーしたが、日本人の漢文訓読という操作について、懇切な説明を試みている。1859年来日したJ・C・ヘボン(Hepburn)も、同じ論語の学而篇を引用して、アメリカ本国への書簡に「日本人は漢字に格や動詞の語尾をはさんで熟語を作ったり文を綴ったりする」と報じている。共に日本語研究をすすめたS・R・ブラウンもこの方法に目を見はった。欧米では、鎖国日本がどのような言語を用い、どんな文学を持っているかさえ知ることが困難で、メドハーストがバタビヤでオランダ商人から得た乏しい材料をもとに、「どうやら漢字を操る国民であるらしい」といったおぼろげな観測を下したにすぎない。(Walter Henry Medhurst 1796—1859)

ブラウンは中国宣教の経験から日本へ派遣されたと見られる東洋通であるが、中国語ができれば日本語習得は簡単だという当時の先入観が、全く見当ちがいであることを先ず指摘せねばならなかった。

ブラウンは宣教上役立つと思われる日常語に着目して、柴田鳩翁の教訓書「鳩翁道話」を読むことから始めた。これには和歌・仏教上の説話・世間を渡る上に必要な常識を説いた格言やたとえ話が、女こどもにも理解できる平易な話しことばで書き写されている。盲目の鳩翁が石門心学の道話を説き、息子の遊翁が筆記した体であるが、「ござります」調の軽妙な語り口で親しまれていたものである。庶民の日常現代語を文字化したこの本に着目したブラウンの炯眼はさすがと思われる。

ブラウンは当時の会話資料として貴重な「Colloquial Japanese」(1863)を上海で印刷出版するが、このほかにも宗教上の出版がある。

神奈川在の成仏寺にブラウンと同居したJ・C・ヘボンは、ブラウンが日常の話し言葉から入ったのに比べ、書き言葉をも重視した。日本人の言文不一致が不合理であることは認めながらも、現実をそのまま受容し、漢文訓読の習慣は聖書和訳に利用し、古典を読み、語を集め、日本語全般にとり組むという態度である。したがって当時の武士や医師など教養人の読む本を、片

はしから集め、辞書編纂のためには庶民の娯楽むき通俗書に至るまで、寺の書齋に積み上げた。

幕府の取締で書物買入れの不自由な時代に、深川商人が「孝経」「三字経」「行書教」「人国記」を頼まれて届けている。

また、後年「Hepburn of Japan」の中でW・E・グリフィスが、ヘボン博士の読書について「東海道中膝栗毛」や頼山陽の「日本外史」を熟読したと記している。十返舎一九は、享和二年(1802)東海道を旅する二人を主人公にした、リアルな旅行よみものを出版した。精進潔斎して家を出たわりには、好色やけちで、失策を重ねる憎めない彌次郎兵衛と喜多八は、町人にとって親しい存在となり、以来二十年にわたるロングセラーとなった。版元は八年続けて刊行し、「版木も刷りつぶれ候」と宣伝する有様だった。会話から活写される庶民の言語生活に加えて、古女房をだまし、飯盛女をからかい、宿場の安酒にうつぶんを晴らすこの時代の人情、彼らの文学たる笑いや洒落、地口、狂歌、狂言、謡曲の世界が、どのように町人たちの潤いとなっているか、ヘボンとは程遠い黄表紙の世界をのぞき見る恰好の書物だったといえよう。

「膝栗毛」と対照的に、「日本外史」を愛読する読者層の多かったことも事実である。最初ヘボンは歴史書として読みはじめたろう。言語感覚にすぐれ、日本人のなかに住んで日本人への鋭い観察眼を持つ彼は、この本の文章の魅力、開国の不安と幕府衰亡の予感に、神経過敏となっている武士階級に愛される筆力を感じとって、多忙のなかにもかかわらず、ほぼ全巻を通読したという。鮮血しぶく外人殺傷事件を相次いで見なければならなかったヘボンは、当然尊皇攘夷の風潮の背景を探ろうとした。頼山陽の流麗な筆致、楠正成や新田義貞の論贊を読み、情熱的で歯ぎれのよい文章を青年たちが吟ずるのを見て、史書であるより思想的文学書と感じたにちがいない。中国語を学んだヘボンやブラウンにとって、日本人の漢文体が、異様な印象を与えたことは否めない。中国の文章に、返り点を施して訓読し、不合理とは感じないばかりか、「日本人の漢詩文」という奇妙なものを作る。この点は荻生徂徠の主張

と通じる。四書五経を素読する当時の教育に疑問を呈し、「記憶力ばかりで思考力を養成できないではないか」と評している。ヘボンもブラウンも、日本人が口語を俗なるものとして卑しめ、言文二途を採用していることを、日本文学のために惜しんだが、この時代すでに口語は文学の中に生きておどりだしていた。要なきものだった雑談が、読者を増やして文学の一ジャンルとなり、さらに俳諧川柳などにも活躍している。

さて、彼らの共同訳した聖書は、美しい雅びな文章を採用したが、これは主としてヘボンが日本人助手たちの手を借り、あらゆる日本文学から得たエッセンスが結実したものといえる。「詩篇」の訳を担当したG・H・Verreck（フルベッキ）もなみなならぬ古典からの教養をうかがわせる。

W・E・グリフィスは、ヘボンが膝栗毛を読んだことについて「博士は好きで読んだわけではないのだ。異教徒の心の泥に純白の蓮の花が咲くのを願って」「肥料をほどこすような」行為として、聖書和訳の下仕事の為だと説く。彼自身、この作品について「旅行記として目下のところ最高傑作とせねばなるまい。あふれる機知、ユーモア、鋭い諷刺、気のきいた叙述、おもしろいエピソード、めまぐるしく変化する場面、帝国内の交通量はげしい主幹道路を舞台とした秀逸なよみものである。しかし、かなり低俗な話で、下品な行動にみちていて、人の世の幸福や精神の安らぎ崇高さとは無縁である」とも言う。グリフィス自身、多くの文学作品を集め、読破したが、最初のうち、卑わいさ、下品な言葉づかいに耐えられず、途中で投げ出したことも度々だと告白している。福井で藩主と藩士の結びつきを身近かに見、藩の消滅を体験し、夥しい日本論、日本人論を書いたグリフィスにしてこの言である。ニューブランズウィック、ラトガース大学のグリフィス蒐集日本写真集を手にすると、この人が決して東部教養派のこちこち頭ではなく、温かい日本人愛を終生いだき続けたと信じられるのだが、二十才代で、いきなり滑稽本では、拒否反応も大きかったろう。

十九才で来日したE・M・サトウは、書記官速成養成の特訓に中国語を叩

きこまれて来たが、なんの役にも立たず肩すかしをくった一人である。着任の日から、ブラウンが「鳩翁道話」をテキストにして教えはじめた。日本の本を集める一方で医師出身の男に日本語を個人教授してもらう。この男が「我^{アイ}ラブプリンスプリンスラブスメン 愛 君 君 愛我々…」と書いた話は、漢和英の各言語の諸問題もはらんでいておもしろい。成仏寺で、トミーと呼ばれる立石斧次郎たちやブラウンと、狐や怪談の信憑性について討論したこともあった。サトーが蒐集した本は一万八千を超えた。天理図書館に、「赤坂文庫書目土代」と書かれた四冊の目録が残っている。これには代価がついたままで、(箱文庫と塙忠韶稿と二種)若い頃のサトウが、買い集めた様子まで想像されるが、貴重な蒐集本、寛永以前の古版本や朝鮮版の古活字本、浮世絵類は、イギリス本国ケンブリッジ大学や大英博物館に送られ、有名な書店サザビースなどにも売却されねばならなかった。サトウの「日本耶穌会刊行書誌」が契機となって吉利支丹版に改めて光が当てられたことは特筆したい。新村出・重久篤太郎、楠家重敏ら各氏の研究に詳しいが、サトウは蔵書を日本で知りあったW・G・アストンや、B・H・チェンバレンにゆずっている。薩道の蔵書印(コピー参照)と王堂(チェンバレン)蔵書印の双方が捺されたものもある。サトウの「王堂君エ贈致スル書籍目録」の裏表紙には一八八五年一月一九日とあり、外交官として多忙の日々、チェンバレンと会っては文学談を交わすのが楽しみだった頃、一時帰国を前に譲渡の話が成立したものと思われる。サトウがオールコック公使の下で年俸200ポンドをとっていた頃(アストンも200ポンド)、アレキサンダー・シーボルトは抜群の日本語を高くかわれて、300ポンドで着任した。それが、パークス公使の時代になると、俄然サトウが上席となり、700ポンド支給されている。(A・シーボルトは500ポンド)本の購入にも力が入り、(ただし芸妓や翳間をあげて遊ぶことも、なかなか旺んだったようだ)1882年には「朝鮮の活字と日本の古版活字本についてのノート」(アジア協会紀要)を発表するほどの成果を挙げている。(横浜開港資料館蔵)

チェンバレンは、1886年から帝国大学の教授として博学ぶりを発揮し、古

事記や日本の詩歌を英訳し、1912年、日本を去るまでに「王堂文庫」とよばれる蔵書数一万冊を超える本を貯えた。多くは上田万年氏に譲られたが、天理図書館に「英王堂蔵書目録」（これも代価が記入されている）二冊があり、英王堂と書かれた用箋そのままに、蒐集者の風貌がしのばれる。

W・G・アストン(阿須頓)は「神道」(1907)の著者らしく、宗教についての蔵書が多く、ケンブリッジ大学に9500冊の愛蔵本が保存されている。(円地文子「なまみこ物語」また平川祐広氏の近著「破られた友情」が、この間の事情をうかがわせる。)

L・ハーンの時代に至ると、来日外国人の数もふえて、限られた紙数で語りつくせないが、中国の白話小説が、上田秋成の筆にかかると、全く日本的なものに生れかわり、今昔物語、秋成の雨月物語がハーンの語り口によって描かれると、ハーンの美意識で選ばれた世界のものがたりになる。ハーンの文学は今も教科書にまで採用され、欧米人の目が荒唐無稽と見ていた日本の伝説への認識を改めてくれた。ハーンの思い入れに満ちた昇華に接すると、かつて行われた宣長と秋成の論争が脳裡をよぎる。

フランスの人々の活動も目ざましいものであった。長崎大浦天主堂で、浦上のかくれキリシタンを再発見したプチジャン神父は、命がけで配流者の解放に奔走する一方、吉利支丹版の再刻に努力し、「聖教日課」ほか自らの出版物にも力を注いだ。ヘボンやサトウが、吉利支丹時代の文学に注目したのと同様、葬り去られた十六世紀の高雅な出版物を、復活させるきっかけを作ってくれた。

プチジャンと協力したジラル神父は、カトリックの日本教区長として、早くも文久元年に横浜天主堂を建てたが、彼の説く美しいフランス語・ラテン語・日本語の朗詠は、覗きに行った日本人に、西洋文化に占める宗教美を教えた。

レオン・ロッシュ公使とM・カションが、栗本鋤雲と交流を結び、横浜にフランス語学所を創立したことは、フランス文学史に記される一条である。

富田仁氏の紹介によるカシヨンの「アイヌ」は、今もフランス語の教科書に用いられている。

また、杉本秀太郎氏が、カシヨンをスタンダールのジュリアン・ソレルに擬しておられるので、「匏菴十種」の作者栗本までが文学味を濃くするのは妙である。京都でフランス文学を紹介したヴィリヨン神父や、法律を教える立場で来日し、日本に魅せられた J・ブスケ、美術品をフランスに紹介して、パリのイエナにミュゼ・ギメを建てた E・ギメのことも忘れてはならない。「Promenade Japonaises」を書いたギメは、寺々を巡って、宗教に関する質問を繰り返す。因果とは？罪とは？「問対略記」を読めば、この人の誠実さと、その報い少き行脚に同情を禁じ得ない。

子供の文学や、芝居への反応、廓文化、出版事情にも触れたかったが、別の機会に譲ろう。全く異質な風土、異質な宗教・文学のなかで育った人々が、幕末というヒステリックな時代の困難に耐え、武士が身分を秘して戯文を綴ったり、神官禰宜・仏僧・国学者が、教導職となって諸国行脚するような屈折した時代、文章の奥にあるものを読みとろうと努めた熱意に感謝したい。この地道な探究があったればこそ、現在の日本文学研究の成果が生れたと言えよう。限られた時間で、かいなでのそしりは免れまいけれど、これを機として御教示を得ることができれば幸である。

Philip Franz von Siebold	1796-1866	F Brinkley	1841-1912
Jan Hendrik Donker Curtius	1813-1879	William George Aston	1841-1911
Rutherford Alcock	1809-1897	Erwin von Balz (Baelz)	1849-1927
John Liggins	1829-1912	Alexander Siebold	1846-1911
Samuel Welles Williams	1812-1884	Basil Hall Chamberlain	1850-1935
James Curtis Hepburn	1915-1911	George H Bousquet	1843-
Samuel Robbins Brown	1810-1880	Edward Sylvester Morse	1838-1925
Guido Herman VerVeck	1830-1898	David Murray	1830-1905
William Elliot Griffis	1843-1928	Frank W Eastlake	1858-1904

Charles Eirgman	1832—1891	Lafcdio Hearn	1850—1904
John Reddie Black	1816—1880	Ernest Francisco Fenollosa	1853—1908
Leon Roches	1808—1901	Wenceslau de Morase	1854—1929
Bernard Petit Jean	1829—1884	Pierre Loti	1850—1923
Mermet de Cashon	1828—1871	William Nortton Whitney	1855—1918
Emile Etienne Guimet	1836—1907	Walter Weston	1861—1940
Ernest Mason Satow	1843—1929	Ludwig Riess	1861—1928
William Willis	1839—1894	James Murdock	1856—1921
James Summers	1828—1991	Daniel R Mckenzie	1861—1935
		Arther Lioyd	1852—1911

討議要旨

Smits Ivo氏が、オランダ人の書いた日本語の俳句がある例を示された。発表者は、商館長がよんだ俳句（参府旅行の途中吟）を紹介、オランダの場合、ホフマンやクルチウスの文典等があまりにも輝かしくて、文学面が知られていないことは、自分も感じている、と述べられた。